

終助詞を用いた推量表現

—談話論による松本方言の分析—

沖 裕 子

キーワード：終助詞，松本方言，推量表現，語義，文意，談話表現的意味

要 旨

表現法調査における推量表現の調査場面で、「明日は、雨カナ。」「明日は、雨だヨネ。」のような終助詞を用いた表現が回答される事実に注目し、松本方言の内省による意味分析をおこない、語義、文意、談話表現的意味の3レベルを分別しつつ記述することによって、その理由を指摘する。終助詞は、意味的には文副詞と同様に命題Pに対する心的態度をあらわし、接続する場合には、「[P: [P: 明日は、雨] カ] ナ」というように、前出の終助詞節に対してさらに心的態度を加える構文をとる。「明日、雨カナ」で例示すると、カで<命題P (明日、雨) に対する疑い>が示され、ナで、<命題P (明日、雨カ) に対し考慮中>であることが示される。語義と文意は抽象的に記述され、文意は、命題Pに対する疑いを考慮中であることしか示さない。この終助詞文が、実際の場面で判断の留保を意図的に前景化させて発話されたとき、談話表現の臨時的意味のひとつとして<<推量>>に解釈される。

1. はじめに

方言（言語）は、表現の宝庫である。その地域に出向き、表現法調査の場面を示しながら、「明日は、雨が降るだろう」ということをどのように言いますかと問えば、様々な表現が返ってくる。そのなかには、たとえば「明日は、雨カナ。」「この分だと、明日は、雨だヨネ。」などという、終助詞を用いた推量表現が含まれている。

「明日は、雨。」「明日は、雨だ。」というように、終助詞「カ」「ナ」「ヨ」「ネ」を取り去ってしまうと、それらは断定表現に変化して推量の意味内容は見出せなくなることから、「カ」「ナ」「ヨ」「ネ」が、何らかのしかたで推量表現の形成に関与していることが明らかである。ところが、従来の方言文法や方言表現法の研究では、終助詞が表現形成に与るしくみについては等閑視されてきた。たとえば、国立国語研究所による『方言文法全国地図』では表現法調査項目を地図化しているが、推量表現（同第5集）では、終助詞を除いた形式の地図化を行っている。たしかに、推量を担う文法形式の言語地図にはなっているが、表現レベルにおける終助詞の働きに関しては、考察が据え置かれているといえるのである。本論では、論者の母方言である長野県松本市の方言を、個人語の範囲で内省することによって、「明日は、雨カナ。」「明日は、雨だヨネ。」が推量表現に分類されるしくみを考察してみたい。

内省による意味の観察を行う必要性から、本論中では、論者の個人語^{註1}を指して「松本方

言」と呼ぶ。論者の個人語は、長野県松本市で使用される言語と一部が重なるが、重ならない部分も含んでいる。それらについてはできるだけ注記するが、判断が原理的に困難な場合もある。また、国広哲弥（1982：40-41）が考察するように、意味分析に際しては必ず個人差の問題が障壁となることは免れ得えない。本論でも同様の立場をとりたい。

2. 推量表現とは何か

「推量表現」を「文法的に推量を表わす形式」もしくは「文法的に推量を表わす形式によって表現される文」と考えると、それらは文法論で扱われる問題になりはするが、談話表現論で扱われる問題とはならない。本論が考察対象としたいのは、「話し手が、何かを推し量り、それを相手に伝えたり、独り言を言ったりするときの言い方」である。これを、本論では「推量表現」と定義しておく。この定義にしたがえば、話し手の推し量りのしかたには、様々な方法があり、また、様々な述べ方がある、ということになる。そして、各方言独自の推し量り方があり、方言独自の述べ方がある、ということにもなる。これが、方言表現法の研究の対象である。その方言における表現類型を産出理解するしくみを解明してこそ方言について理解したといえ、また、その方言を使用する道が開けると考える。

表現は談話レベルの単位であるため、表現を考察対象とする場合は談話論で扱うことになる。以下、終助詞を用いた推量表現について、具体的に考察を進めたい。

松本方言を対象に、例示しよう。「明日は、雨が降るだろう。」ということを使う場合に、つぎの【表1】のような表現が挙げられる。場面のなかで了解されていれば、「明日は」は省略可能である。ちなみに、話し手の推し量りを含んだ談話表現である「推量表現」には、原理的には無限の産出可能性がある。【表1】は、それらの産出可能性のなかから、特に述部に注目してその変異形の一部を選んで例示したにすぎない。また、ここには、伝聞情報による話し手の判断や、確信度の違いによる表現の異なりなども含んでいるが、話し手が明日は、雨が降るだろうということを推し量って述べる表現に含まれるものは区別せずに挙げてある。

なお、アクセントは省略に従い、句末イントネーションのみ、『、』で記しておく。『は、その前後拍がアクセントとしてもつ相対的高低を基準として、『の右に記された拍のピッチが高く実現されることを示す。同様に、』は、その右に記された拍のピッチが低く実現されることを示す。↓は、句末拍母音が伸長して下がることを示す。たとえば、ズラは、単独で発話された場合、アクセント記号〔 〕を用いて記すと「[ズ]ラ」というアクセントをもつ。これに話し手が選択する句末イントネーションが働いて、談話では、ズよりラが高くなることもある。これを表記するのに「雨、降るズ『ラ』のように記す（沖裕子2012参照）。なお、イントネーションについても、場面と意図に応じた無限の表現があるため、ここにあげた用例はあくまでも例示である。

【表1】松本方言の推量表現例

雨、降るズ『ラ。	雨ズ『ラ。
雨、降るンジャナ『イ。	雨ジャナ『イ。

雨, 降るデ『ショー／デショ』一。	雨デ『ショー／雨デショ』一。
雨, 降るデ『シヨ。	雨デ『シヨ。
雨, 降るダ『ロ。	雨ダ『ロ。
雨, 降るダロー『ネ。	雨ダローネ。
雨, 降るッ『テ。	雨ダッ『テ。
雨, 降るッテバ／降るッテ』バ。	雨ダッテ』バ。
雨, 降るンダッ『テ。	雨ナンダッ『テ。
雨, 降るラシー『ヨ。	雨ラシー『ヨ。
雨, 降るヨーダ『ヨ。	雨ノヨーダ『ヨ。
雨, 降るミタイダ『ヨ。	雨ミタイダ『ヨ。
雨, 降るカ『ナ。	雨カ『ナ。
雨, 降るカ『ヤ↓。	雨カ『ヤ↓。
雨, 降る『ネ。	雨ダ『ネ。
雨, 降るヨ『ネ。	雨ダヨ『ネ。

3. 形態法からみた推量表現

【表1】に挙げた表現は、形態法的にはどのように組み立てられているだろうか。宮岡伯人(2002)に従うと、つぎのように分析できる。以後、「-」の右の形式は接辞, 「=」の右の形式は倚辞(いじ)を示す。倚辞とは、独立して用いられることはないが、語である形式を指す。

【表2】形態法からみた松本方言推量表現例

雨, 降る = ズラ	雨 = ズラ
雨, 降る = ン = ジャ = ナイ	雨 = ジャ = ナイ
雨, 降る = デショー	雨 = デショー
雨, 降る = デシヨ	雨 = デシヨ
雨, 降る = ダロ	雨 = ダロ
雨, 降る = ダロー = ネ	雨 = ダロー = ネ
雨, 降る = ッテ	雨 = ダ = ッテ
雨, 降る = ッテ = バ	雨 = ダ = ッテ = バ
雨, 降る = ン = ダ = ッテ	雨 = ナ = ン = ダ = ッテ
雨, 降る = ラシー = ヨ	雨 = ラシー = ヨ
雨, 降る = ヨー = ダ = ヨ	雨 = ノ = ヨー = ダ = ヨ
雨, 降る = ミタイ = ダ = ヨ	雨 = ミタイ = ダ = ヨ
雨, 降る = カ = ナ	雨 = カ = ナ
雨, 降る = カ = ヤ	雨 = カ = ヤ
雨, 降る = ネ	雨 = ダ = ネ
雨, 降る = ヨ = ネ	雨 = ダ = ヨ = ネ

【表1, 2】は、「雨, 降る」もしくは「雨」の、後ろに膠着する倚辞の複合的拡張形式によって表現されている。多様な倚辞が次々と累加されている表現であるが、その拡張には一定の法則性がある。【表1, 2】の左列は、「雨, 降る」という文の述語動詞の後部に倚辞の膠着による複合的拡張がおこっているようにみえるかもしれない。しかしながら、「降る」は動詞終止形であって、「雨, 降る」全体が名詞に比肩する静止的表現であると考えれば、形態法的には、【表1, 2】にあげた左右の列のいずれも、形態法的拡張の方法では大差がないといえる^{註2}。

また、「雨=カ=ナ」「雨=カ=ヤ」などは、いわゆる指定辞が無い文である（「*雨=ダ=カ=ナ」「*雨=ダ=カ=ヤ」は非文）。ちなみに、「雨=カ=ナ」「雨=カ=ヤ」は、1語文ではない。「雨=カ=ナ」「雨=カ=ヤ」を「(抽象的に切り出されるレベルである)文」と認めるならば、いわゆる指定辞がなく、「喚体の句」でもなく、1語文でもない、「文」というものが存在していることになる。なお、受け手は、「[(明日は,) 雨] カナ」「[(これから,) 雨] カナ」などの()内のような省略を補って解釈することになる。

いずれにしても、形態法的には、ズラ、ダローなどを含め、動詞終止形および名詞の後に膠着する多様な倚辞群による拡張形式によって、多様な推し量りの表現を得ているのである。

4. 終助詞の定義と松本方言終助詞

さて、本論では、【表1, 2】のなかから、「雨, 降るカナ。」「雨カナ。」「雨, 降るヨネ。」「雨だヨネ。」などという表現をとりあげて考察してみたい。終助詞「カ」「ナ」「ヨ」「ネ」を取り去ってしまうと、「雨, 降る。」「雨。」「雨だ。」という表現になる。するとこれらは断定表現となり、そこに推量の意味内容は見出せなくなることが分かる。このことから、「カ」「ナ」「ヨ」「ネ」が、何らかのしかたで「推量表現」の形成に関与していることが知られる。

終助詞には、形態的、構文的、意味的な観点からみると、次のような特徴がある。

- ① 形態的には、活用しない倚辞である。
- ② 相互承接が可能である。
- ③ 構文的には、文末に位置する。
- ④ 意味的には、命題Pに対する話し手の心的態度をあらわす。意味的働きのみ注目すれば文副詞の一種である。

文副詞とは、次の下線部のようなものを指して言われる。

- (1) [幸い, [試験に合格することができた]]
- (2) [からくも, [最下位をまぬがれた]]
- (3) [なんといっても, [我が家が一番だ]]

「からく=も」「なん=と=いっ-て=も」のような副詞句も含め、簡略に副詞と呼んでおく。これらの副詞は、意味内容の点で後に続く命題P全体と関係を有し、命題P全体を修飾していることから、文副詞と呼ばれてきた。文副詞は、命題Pに対する話し手の主観的態度を表わしている。ちなみに、それぞれ「試験に合格することができた」「最下位をまぬがれた」「我が家が一番だ」が命題Pである。

文副詞が、命題Pの外側前部に位置して、当該命題に対する話し手の心的態度を表わす

のに対し、終助詞は、命題 P の外側後部に位置して、当該命題に対する話し手の心的態度を表わしている。置かれる位置は異なるが、意味的観点からみれば、終助詞と文副詞の働きは同様である。宮岡伯人(2002: 81)が、文末詞(終助詞)を、「広義の副詞」と注記するのも、こうした考え方を指しているものと推測する。

なお、終助詞どうしは接続させることができ、その相互承接の順序も定まっている。この場合、より後に結節される終助詞は、入れ子型に、それより前の形式全体の内容について心的態度を付加していくと考えられる。真偽判断が可能であることをもって命題 P とすると、命題 P に対する心的態度を付加した文 p に対して再吟味し、さらに心的態度を付加していく、次のような構文だと考えられる。

(4) [[P: 雨, 降る] ネ]

(5) [[p: [P: 雨, 降る] ヨ] ネ]

(6) [p: [p: [P: 雨, 降る] ラシー] ヨ] ネ]

たとえば(5)の「雨, 降るヨネ」は、「雨, 降る」という P に対する心的態度をヨが示し、さらに、「雨, 降るヨ」という p に対する心的態度をネが示すという構文である。以後、煩雑さを避けるため、本論では、ここに述べた p についても区別せず、命題 P と一括して呼んでおく。

さて、前述①から④の定義によってとりあげられる松本方言の終助詞は、以下の通りである。

ヨ, ネ, ナ, ダ, ゴ, ジ, サ, カ, ヤ

デ, ワ, カラ, ケド, ット, ッテ, テバ, モン, ノ, コト, ジャナイ, ジャン

カッチャ, ズラ, ダロー, デショー

松本地域高年層に使用されている終助詞には、さらに、イ, ン, ドなどがあるが、論者は使用しないため除いた。マシヨは、終助詞ではなく、動詞の活用語尾である。また、上のダは、動詞、形容詞、形容動詞ダ、指定辞ダ、に後接する^{註3}。カッチャは長野市を中心とした長野県東信方言であるが、論者の母親が使用するため、使用。ダロー、デショーは、動詞に後接する活用しない倚辞で終助詞化している。

これら終助詞の体系性に関する考察は別稿に譲り、ここからカ, ナ, ヨ, ネをとりあげ、終助詞という語詞の有する意味(語義)と、終助詞を含む文の意味(文意)と、これらが推量表現として機能する談話レベルの意味(表現的意味)とを分別しつつ位置づけ、終助詞による推量表現について、以下に考察してみたい。

5. 終助詞語彙の意味分析の方法

現在、動詞類の意味分析の方法は確立されているが、終助詞の意味分析の方法は未だ確立されているとはいえない。そのため、ここでは、使用される場面を参照しながら、当該終助詞によって命題 P がどのようにとらえられているかを内省しつつ、分析を進めたい。また、意義素析出の根拠として、類義終助詞をできるだけ比較しつつ分析を加えていきたい。カについてはひとまず措き、類義語ナ, ヨ, ネの意味分析を進めていく。

なお、文末にみられるイントネーションは談話レベルに付帯する超分節的単位であり、抽

象的単位としての語はイントネーションからは独立している。そのため、語義の記述に際しては、イントネーションを取り去って、語という記号それ自体が持つ意味の記述を行う必要があると考える（沖2012参照）。いちいちの引用をしないが、この点は、終助詞の意味分析を行う先行研究の大方が、イントネーションの異なりを終助詞のいわば「語形」自体の異なりとして扱い、それぞれの「語形」に応じた意味または用法の差異を観察する立場をとることとは異なっている。アクセントは語形の一部であるが、イントネーションは話し手が選択的に付与できる単位であることから、語形には属していない（意識的な選択か無意識の選択かは、この場合無関係である）。その点で、語の持つ意味とイントネーションの有する意味を切り離す必要があると考えるものである。

相互承接について記せば、ナ、ヨ、ネは、単独でも使用されるが、ヨネ、ヨナとも接続する。なお、*ネナ、*ネヨ、*ナヨ、*ナネという接続はない。また、ネは、間投詞としても使用され品詞相通する。ここでは、1 倚辞が有する意味について記述していく。

それでは、用例をみていきたい。(7)の話し手 a b c は、近隣の親しい同輩を想定した。

(7) (隣組の会合に、同じ隣組の押沢さんが行くかどうかについて話をしている。)

a 1 : 明日、押沢さんは、行くナ。

b 1 : うん。きっと行くネ。

c 1 : うんうん。きっと行くヨ。

(7)は、a 1, b 1, c 1の発話順番を入れ替えても成立することから、「行くナ」「行くネ」「行くヨ」のいずれが始発発話になることも可能である。

また、同一の命題 P に、ナ、ヨ、ネを下接させることも可能である。たとえば、(8)をあげたい。

(8) 明日、押沢さんは、行くナ。

明日、押沢さんは、行くネ。

明日、押沢さんは、行くヨ。

命題 P に終助詞を後接した場合、ナ、ヨ、ネのいずれかが言えて、いずれかが言えないというような用例がない。つまりは、共起する命題 P の違いを観察することによって、ナ、ヨ、ネの意味分析をおこなうという方法が閉ざされたことになる。そのため、これらの終助詞は、個人語の内省によって意味を分析する方法を妥当として進めざるをえないのである。

6. 終助詞の語義と談話表現レベルにおける含み

さて、正文非文判断と、談話適切性判断について、東京語では次のように述べられることがある。＃は、正文であるが談話的に不適切であることを示す。

(9-1) ○あ、時計、落としましたヨ。(始発発話)

(9-2) #あ、時計、落としましたネ。(始発発話)

(10-1) #いい天気ですヨ。(初対面での始発発話)

(10-2) ○いい天気ですネ。(初対面での始発発話)

ここでは、論者自身の個人語に即してこれらの文意を内省してみる。すると、次のように説明できる。「あ、時計、落としましたヨ。(始発発話)」は、話し手が「[P:(あなたが)

時計を落としました]」と心内で考えていることを相手に告げる場合に使用するのに対して、「あ、時計、落としましたネ。(始発発話)」は、話し手が「[P:(あなたが)時計を落としました]」ということを経験を心内で判断を加えずに受け止めている、ということを経験を相手に告げるときに使用する。

また、「いい天気ですヨ。(初対面での始発発話)」は、話し手が「[P:いい天気です]」と心内で考えていることを相手に告げる場合に使用するのに対して、「いい天気ですネ。(初対面での始発発話)」は、話し手が「[P:いい天気です]」ということを経験を心内で判断を加えず受け止めている、と述べるときに使用する。

このように記述すると、なぜ(9-1)(9-2)(10-1)(10-2)のような判断がしばしばなされがちであるのかが説明できる。相手が時計を落とした場合、相手が時計を落としたと自分は考えているというように述べれば、相手がそれに注意を向けるようしむけるという談話の流れになる。それに対し、相手が時計を落としたことを自分はただありのままに受け止めていると述べれば、それが感想につながり、傍観者的な含みが生じて尊大さが漂い横柄な談話の提示になるからであると考えられる。しかしながら、これは、談話の慣習的穏当さに留意した場合の(9-1)(9-2)の判断であって、談話表現として(9-2)が不適切である、ということにはならない。なぜなら、もし(9-2)を発話すれば、そのような意図が確かに相手に伝わるからである。

また、談話冒頭部に「いい天気ですヨ。」と発話すると、いい天気だと自分は考えているというように述べることで、相手がそれに注意を払うよう強いるようなことになり、談話の流れとしては強引さが感じられる結果になる。談話冒頭部に「いい天気ですネ。」と発話すると、いい天気であることを自分はただありのままに受け止めていると述べることで、感想をもらったふうになり、相手の感想を待つという自然な談話の流れが感じられる結果になる。この場合も、これは、談話の慣習的穏当さに留意した場合の(10-1)(10-2)の判断であって、談話表現として(10-1)が不適切である、ということではない。

たしかに、一般の会話における自然さを考慮すれば、(9-1)(9-2)(10-1)(10-2)の判断となるであろう。しかし、不適切であるとされる(9-2)(10-1)であっても、それぞれの意図を伝える談話表現としてはたらく。選択した形式が場面において実際に使用されたときに、そのような談話的効果が生まれるのである。(9-1)(9-2)(10-1)(10-2)の判断は、多様な場面に応じた多様な談話表現結節に関する適切性判断というより、慣習的表現としてみた適切性、穏当性を判断しているのだと言えよう。談話表現には無限の可能性があり、それぞれの場面や意図に応じたその場の表現が工夫できる単位が談話である。そのパロール性こそが表現的創造につながる価値を有していることを考えると、談話表現の適切性判断と、慣習的表現性判断の違いを、分別しておくことが必要であると考えられる。慣習的表現性の判断には方言表現法の考察対象とすべき重要な価値があるが、当面の本論の目的からは除かれる。

ヨ、ネにつづいて、ナについては、以下のように考える。

(11) 明日、押沢さんは、行くナ。

(11)は、「[P:明日、押沢さんは、行く]」ことについて、自分自身に問いかけながらいまそれを考えていると述べている。次の(12)をみられたい。

(12) そうだな。

そうだヨ。

「そうだナ」と「そうだヨ」では、ナが「[P: そうだ]」という判断を保留している感じがあるのに対して、ヨは「[P: そうだ]」という判断を主張している感じがある。これは、ナとヨの語義の差から来ている。なお、次の(13)についてもみておきたい。

(13) 本当にそうだナ。

本当にそうだヨ。

「[P: 本当にそうだ] ナ」では、心内で自分自身に問いかけながら「[本当にそうだ]」と考えていると述べており、「[P: 本当にそうだ] ヨ」では、心内で自分は「[本当にそうだ]」と考えていると述べているように感じられる。命題 P が「本当にそうだ」という判断であっても、ナを後接することによって、後置されるナの意味が付加されて、文意が成立する。そのために、「[P: 本当にそうだ] ナ」は、迷いのない主張ではなく、自問自答の逡巡を有していることが示されている。同様に、「[P: 本当にそうだ] ヨ」は、「本当にそうだ」とまさに文字通り考えていることが示されている。

さらに、次の(14)についても、同様である。

(14) 明日は、水曜日だナ。

明日は、水曜日だヨ。

明日は、水曜日だネ。

「[P: 明日は、水曜日だ]」ということに対して、ナは、自問自答しつつ自己の考えを述べ、ヨは、自分はそのように考えていると述べ、ネは、ありのままに受け止めていることを述べている。「ねえ、明日は何曜日？」と問われた会話の受話として、ナ、ヨ、ネが発話された場合を考えてみよう。

(15) a : ねえ、明日は何曜日？

b : 明日は、水曜日だナ。

(16) a : ねえ、明日は何曜日？

b : 明日は、水曜日だヨ。

(17) a : ねえ、明日は何曜日？

b : 明日は、水曜日だネ。

ここでは、ナ、ヨ、ネの語義をふまえて、談話表現的な含みが、たとえば次のように感じられるのである。すなわち、「明日は、水曜日だナ。」は、思い出しながら、あるいは不確かなのでカレンダーを確認しながら発話しているような感じ。「明日は、水曜日だヨ。」は、よく知っていて、即答している感じ。「明日は、水曜日だネ。」は、自分でも思いたせなくて手帖を出し、そこには水曜日とあるのをみながら返答している感じ。こうした「感じ」は、場面を有した実際の会話のやりとりのなかで生じてくる意味だといえる。

このことは、たとえば次の(18)(19)(20)のように、会話冒頭部に、同じ命題 P に後接する形式が発話された場合を観察してみるとよい。

(18) a : 明日は、水曜日だナ。

b : うん、何？

(19) a : 明日は、水曜日だヨ。

b : うん、何？

(20) a : 明日は、水曜日だネ。

b : うん、何？

(18) 「明日は、水曜日だナ。」は、自分ではそう思うが確信には至らないため、相手に確認しようとして発話された感じ。「明日は、水曜日だヨ。」は、相手に何か文句など言いたいことがあるので、思いきって相手に切り出した、という感じ。「明日は、水曜日だネ。」は、相手を誘いたい気持ちなどがあって、水曜日であることを思い出させようとしたような感じ。

すなわち、ナ、ヨ、ネは同じ命題「[P: 明日は水曜日だ]」に後接していても、それぞれ(15)と(18)、(16)と(19)、(17)と(20)では受ける感じが異なっているのは、談話展開上の出現位置が異なり、談話的意図が変化することによって生じる、含みの差なのだと思えることが妥当である。含みとは、その文を、場面を有した実際の会話のやりとりのなかで使用したときに生じてくる臨時的意味である。すなわち、ナ、ヨ、ネの語義記述においては、こうした臨時的意味を混入させないことが必要である。

以上の議論をふまえると、ナ、ヨ、ネは、内省法によって次のような意義素を記述でき、また、これ以上の意味特徴は必要がないと考える。

/ナ/: <命題 P について、自分自身に問いかけながら・考え中であることを・示す>

/ヨ/: <命題 P であると、自分は考えていることを・示す>

/ネ/: <命題 P を、ありのままに自分は受け止めていることを・示す>

7. 語義と文意と表現的意味の分別

「雨カナ」「雨だヨネ」という表現が、文法的範疇としての<推量>を担う形式を使用していないのに、表現全体としては、なぜ推量を表わし得るかを考えてみたい。これについては、前節に、語義と談話表現の含みとの関係をすでにみてきた。ここでは、終助詞を含む文の意味についての分析を加え、さらに考察を進めていく。

さて、ナ、ヨ、ネの語義は、すでに次のように記述した(再掲)。カの語義は、煩雑さを避けるために意味分析の過程は省略に従い結論だけを示す。

/カ/: <命題 P に対する疑いを・示す>

/ナ/: <命題 P について、自分自身に問いかけながら・考え中であることを・示す>

/ヨ/: <命題 P であると、自分は考えていることを・示す>

/ネ/: <命題 P を、ありのままに自分は受け止めていることを・示す>

さて、「雨カナ」「雨だヨネ」は、次の(21)(22)に示すように、入れ子型の構文をとっている。

(21) [[[雨] カ] ナ]

(22) [[[雨だ] ヨ] ネ]

これらの入れ子を開くと、それぞれ(23)、(24)が得られる。

(23) [[P: 雨] カ]

[[P: 雨カ] ナ]

(24) [[P: 雨だ] ヨ]

[[P: 雨だヨ] ネ]

(23) (24)の意味を、すでに述べてきた終助詞カ、ナ、ヨ、ネの語義に従って説明すれば、それ

ぞれ(25)(26)のようになる。

(25) [[P: 雨] カ]: 雨であることに対する疑いを示す。

[[P: 雨カ] ナ]: [P: 雨カ] について、自分自身に問いかけながら、考え中であることを、示す。

(26) [[P: 雨だ] ヨ]: 雨であると、自分は考えていることを示す。

[[P: 雨だヨ] ネ]: [P: 雨だヨ] について、ありのままに自分は受け止めていることを示す。

(21) 「雨カナ」については、カで<疑い>が示され、次にカを含んだ「[P: 雨カ]」にナを後接し、カによって疑いを示した事態について<自問自答・考え中>であることが示されている。すなわち、カとナの語義と構文によって文意が示されるのである。

他方、(22)「雨だヨネ」は、ヨで<そう考えている>ことが示され、次にヨを含んだ「[P: 雨だヨ]」にネを後接することで、事態をそう考えていることを<ありのままに受け止めている>ことが示されている。すなわち、ヨの後接によって話し手の考えが示されるのではあるが、さらに後接するネによってその示され方が弱まっているのが全体の文意である。換言すれば、終助詞文「雨だヨネ」の意味は、ヨ、ネという終助詞の語義を利用して、「雨だ」という断定を示すものの、それは私の考えであり、その私の考えをただありのままに受け止めて示すものだということにある。また、文意としては、それ以上でも以下でもない。

具体的な場面において、たとえば、外は雨かどうか分からないというような場面で話し手が雨かどうかを推し量りながら「雨だヨネ」を使用すると、場面情報が参照され、また、イントネーションの働きに助けられて<推量>の意味が派生する。これは、談話表現レベルの意味である。ここに、「雨だヨネ。」が、推量を表わす形式がないにもかかわらず、「話し手が何かを推し量り、それを相手に伝えたり、独り言を言ったりするときの言い方」すなわち談話レベルにおいて推量表現に類別されるしくみを見出すことができると考える。

ちなみに、「雨だヨネ。」が確認要求の表現として働くこともある。その場合、外は雨だということを自分は感じているが同席者も同様に感じているかどうか知りたいという意図をもって具体的な場面で発話された場合に、表現全体に確認を求める含みが生じるのであって、終助詞文そのものの文意が変化するわけではないことには注意が必要である。語義、および文意の記述は変更されず、具体的な場面で音声を伴い発話された談話表現の含みにおいて、<推量>や<確認>という表現的広がりを持つことになるのである。このことは、先に述べたように、イントネーションが談話に付帯しており、文意や語義を変更しないことに通じている。

8. 雨カナ、雨だヨネという推量表現成立のしくみ

以上、表現法調査における推量表現の調査場面で、「明日は、雨カナ。」「明日は、雨だヨネ。」のように、文法的に推量を表わす形式であるズラ、ダロー、デショーなどが用いられていない表現が回答される事実を対象に考察を進めてきた。松本方言の内省による意味分析をおこない、語義、文意、談話表現的意味の3レベルを分別しつつ記述することによって、その理由を考察したものである。

終助詞は、語義的には命題 P に対する心的態度を表わしており、文副詞と同様の働きをしている。構文的な位置は、文副詞が命題の前部に置かれ、終助詞が命題の後部に置かれるという異なりはあるが、意味的な働きにおいては同類であるとみなすことができる。

副詞全般は用言を修飾する働きをもっているが、「明日は、多分、雨が降る。」「明日は、きっと、雨だ。」という例文では、文の述語が「降る」「雨だ」という断定判断であっても、「多分」「きっと」という陳述副詞語彙を用いることによって、断定判断の内容が語彙の修飾によって変更されている。そのため、「明日は、多分、雨が降る。」「明日は、きっと、雨だ。」という文全体の文意は、断定的判断の成立する可能性が薄い（多分）もしくは濃い（きっと）ことを示すことになる。すなわち、用言修飾する副詞語彙の助けによって、文意のレベルで推量表現を形成しているといえるだろう。

終助詞文は、これとは異なり、意図的表現行動のレベルで推量的意味を派生させるしくみを有していると考えられる。「明日は、雨カナ。」は、終助詞の語義と構文によって、「明日は、雨」という命題 P に対してカで疑念を示し、そこに後接するナによって、疑念を示したまま考慮中であることが文意として示されている。こうした文意が、具体的な発話場面で推し量りの意図をもって使用されることによって、その文「明日は、雨カナ。」は、話し手の推し量りを示すものとなり、推量表現として機能することになる。また、「明日は、雨だヨネ。」は、「明日は、雨」という命題 P に対して、ヨによってそれが自分の考えであることが示され、そこに後接するネによって、そうした自分の考えをありのままに自分は受け止めていることが文意として示されている。こうした文意が、具体的な発話場面で推し量りの意図をもって使用されることによって、その文「明日は、雨だヨネ。」は、話し手の推し量りを示すものとなり、推量表現として機能することになるのだと考えられる。

ちなみに、本論では、推し量りを、文意ではなく、談話レベルの表現的意味に位置づけたが、このことについていまだ少し述べたい。「明日は、雨カナ。」「明日は、雨だヨネ。」は、具体的な場面において発話されたとき、《推量》だけではなく、《尋ね》など、様々な臨時的意味を持つ。たとえば、次の⑳のような調査場面をあげる。

- ㉗ 調査場面：家族と一緒に、明日の運動会に一緒に行こうということになっていました。しかし、あなたの感じでは、明日の天気は、どうも雨のような気がします。家族団欒の席で、明日の天気のことを話題にして、「明日は、雨だろう。」ということを家族に言おうとする時、どう言いますか。

㉗の場面で、「明日は、雨カナ。」という表現が回答された場合、「明日は、雨カナ。」は、話し手の推し量りを述べる表現として話者は答えており《推量》表現として機能していることが知られる。それでは、たとえば次のような場面㉘では、どうだろうか。㉘の場面で「明日、雨カナ。」と答えられた場合には、その表現は《尋ね》表現として機能していることが知られる。

- ㉘ 調査場面：家族と一緒に、明日の運動会に一緒に行こうということになっていました。しかし、明日の天気について、あなたは知りません。家族団欒の席で、明日の天気のことを話題にして、「明日は、雨かどうか知っているか」ということを家族に言おうとする時、どう言いますか。

「明日、雨カナ」という形式が有する語義と文意そのものは同一であるが、具体的な場面

(27/28)において発話された談話表現のレベルで、種々の臨時的意味を持つことが分かる。「明日、雨だヨネ。」についても同様である。これらは、発話の意図がイントネーションに反映され、また、場面情報が参照されて、語義と文意を超えたところで総合的に産出・解釈される談話表現的意味であると本論では捉えるものである。

具体的なひとつひとつの場面に応じて、ひとつひとつの表現を可能にするところに、話しことばがもつパロール性の真骨頂があり、談話は言語のパロール性を積極的に最大限に生かす単位である(沖裕子2010)。そうした談話表現の多様性が保証されているのは、談話単位を構成する素材である語や文が抽象的に取り出しうる単位であって、それらが核となる意義を担っていることに支えられている。そのうえで、話し手の意図に沿ってイントネーションを利用しながら、具体的場面のなかで使用された時、表現的意味が生成・解釈されると考えている。

文法的に推量判断を担う形式のみに着目しては、語、文、談話が分担するこうした言語表現のしくみに光を当てることができず、方言(言語)が有している多様な表現産出のしくみを体系的に扱う視点が立ちにくい。今後は、各地方言が有している、談話表現選択の慣習的傾向性についても視野におさめながら、表現の多様な展開についてさらに考察を進めたい。

謝 辞

本論は、長野言語文化研究会で発表した「松本方言の終助詞類」(2012年10月20日、長野県松本市あがたの森文化会館)に加筆したものである。席上、有益なご指摘を賜ったことに感謝申し上げます。また、成稿後、木川行央氏(神田外国語大学)より貴重なコメントをいただいたことを記し謝意を表します。本論は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C「発想と表現からみる日本語談話の対照談話論的研究」(2012~2014年、課題番号24520498、研究代表者沖裕子)の成果の一部である。

注

注1) 論者の言語経歴は、次の通り。1955年生まれ。18歳まで長野県松本市。18~27歳、東京都杉並区、世田谷区。27~32歳、和歌山県海南市(勤務先大阪府)。32~38歳、奈良県奈良市(勤務先京都市)。38歳~長野県松本市(勤務先松本市)。

注2) ただし、「雨、降る=ン=ジャ=ナイ」「雨、降る=ン=ダ=ッテ」の「降る」は、動詞連体形が修飾する形式名詞ンによって、名詞節化されている。

注3) 「雨、降るダ。」「歯が痛いダ。」「包み方が丁寧だダ。」「あれは、池だダ。」など。

注4) 現在の研究的趨勢では、終助詞は、命題に対するムードと、対他的ムードの両者を有するとされている。本論では、終助詞の語義、および終助詞を使用した文意のレベルでは前者を記述すれば十分であり、後者は句末イントネーションが担っていると考えられるものである。

参考文献

- 井上優 (1997) 「「もしもし、切符を落とされましたよ」—終助詞「よ」を使うことの意味」『月刊言語』26-2 大修館書店
- 井上優 (1999) 「状況認知と終助詞—「ね」の機能—」『日本語学』18-9 明治書院
- 井上優 (2002) 「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21-2 明治書院
- 沖裕子 (2006) 『日本語談話論』和泉書院
- 沖裕子 (2008) 「談話論からみた「文」と「発話」」串田秀也・定延利之・伝康晴編『「単位」としての文と発話』ひつじ書房
- 沖裕子 (2010) 「依頼談話の結節法」『日本語学研究』28 韓国日本語学会
- 沖裕子 (2012) 「談話論からみた句末の音調と意味」(第79回 NINJAL サロン発表原稿 於国立国語研究所 9月25日)
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4 大修館書店
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 国立国語研究所 (2002) 『方言文法全国地図』第5集
- 佐藤亮一監修 (2009) 『全国方言辞典 CD 付き』三省堂
- 服部四郎 (1947) 「文節について—特に日本語および英語に関して—」『市河博士還暦祝賀論文集 第2輯』(服部1960所収)
- 服部四郎 (1949) 「具体的単位と抽象的単位」『コトバ』2の12号(服部1960所収)
- 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15号 日本言語学会(服部1960所収)
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店
- 馬瀬良雄 (1992) 『長野県史 方言編 全1巻』長野県史刊行会
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か—エスキモー語から日本語をみる』三省堂

The use of sentence-final particles in conjectural expressions: An analysis of Matsumoto dialect according to the theory of spoken discourse

Hiroko OKI

Key words: sentence-final particles, Matsumoto dialect, conjectural expressions, the meanings of words, the meanings of sentences, the meanings of spoken discourse

Abstract: In studies of dialectal expressions, informants usually construe a sentence concluding in a sentence-final particle as a conjectural expression. Grammatically, the sentence-final particle has no conjectural meaning. This paper considers why sentences with sentence-final particles work as conjectural expressions. The author divides the descriptive level into three layers: the word meaning; the sentence meaning; and the expressional meaning of spoken discourse. At the word level sentence-final particles are described as adverbs which modify a proposition and indicate the modality of the speaker. The syntax is described using the IREKO system in which the meaning of each particle is added hierarchically. For example, in the Matsumoto dialectal expression /asita ame=ka=na/, the syntax is ((P: (P: asita ame) ka) na). /ka/ denotes <uncertainty about (P: asita ame)>, while, /na/ denotes <considering (P: (P: asita ame) ka)>. In this paper the meanings of words and the meanings of sentences are described at an abstract level. The sentence above indicates only that the speaker is considering P's uncertainty. Therefore, when this sentence is uttered in a real Situation with the intention of expressing conjecture by making use of connotations of the meanings of the words and the sentence, it is interpreted as a conjecture. The conjecture is the meaning produced at the expressional level of spoken discourse.

(2012年10月31日受理, 12月4日掲載承認)